

感染症発生動向調査委員会報告 6月

今月のトピックス

- 新型インフルエンザが市内で26例報告されました(6月24日現在)。
- 伝染性紅斑が過去5年間で最も高い水準です。
- 手足口病、ヘルパンギーナといった夏の感染症が増えてきました。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成21年5月18日から6月21日まで(平成21年第21週から第25週まで。ただし、性感染症については平成21年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21年 週 - 月日対照表

第21週	5月18～24日
第22週	5月25～31日
第23週	6月1～7日
第24週	6月8～14日
第25週	6月15～21日

全数把握の対象

< 新型インフルエンザ >

6月6日に、市内1例目の発生があり、6月24日現在で26例の発生報告があります。性別の内訳は、男性11例、女性15例で、年齢の内訳は、10歳未満が6例、10代が4例、20代が5例、30代が6例、40代が3例と、50代が2例と若い人が多くなっています。海外渡航歴のあるものが17例です。重症例はありません。全国では、24日現在944例の報告があります。また、横浜市衛生研究所で4月28日以降に新型インフルエンザに関連した検査を542件行いましたが、インフルエンザウイルスの検出数の内訳は新型インフルエンザ27件(1件は横浜市外)、AH1(ソ連型)4件、AH3(香港型)102件となっています。

(横浜市新型インフルエンザ関連情報 <http://www.city.yokohama.jp/me/anken/kikikanri/influenza/>)

< 麻しん >

2009年6月は24日現在で1例の報告があり、予防接種を1回受けていました。

ひと月で100例以上の報告があった2008年に比べてかなり少なくなっていますが、未だ患者発生がありますので、予防接種を1回受けていても、麻しんにかかっていない方は予防接種を生涯2回受けることが大切です。

2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

(日本は、2008年～2012年の5年間で、麻しん排除を目指します)

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握

1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底

5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.gov.jp/disease/measles/index.html>)

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

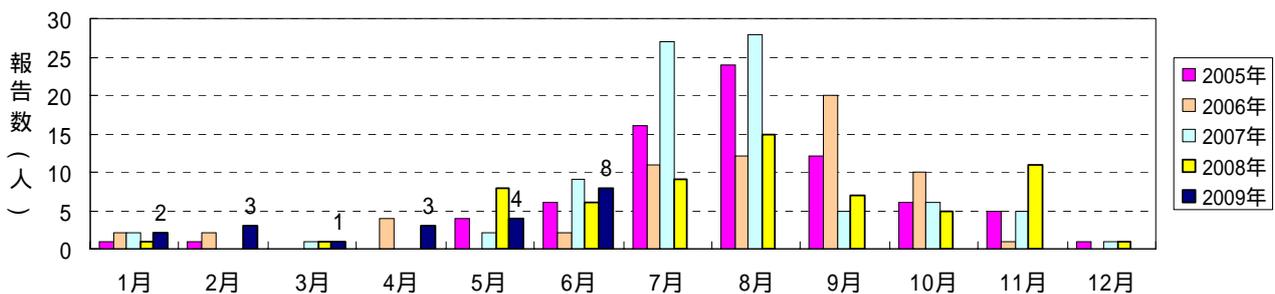
6月の報告数は、24日現在で8例です。今年に入って21例の報告があり、血清型の内訳はO157が12例、O26が2例、O111が2例、O121が2例、O145が1例、O103が1例、不明が1例で、性別の内訳は、男性14例、女性7例で、年齢の内訳は、10歳未満が4例、10代が8例、20代が1例、30代が3例、40代が2例、60代が3例と、10代がもっとも多くなっています。毎年、夏に報告が多くなりますので、注意が必要です。

例年牛レバー等の生食による感染が見られます。

啓発用チラシ「O157に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

腸管出血性大腸菌感染症月別報告数



定点把握の対象

< (季節性)インフルエンザ >

今シーズンは、過去5年間で最も流行開始が早かった昨シーズンに次いで早く、2008年第49週に流行の目やすとなる「定点あたり報告数1.0」を超え、2009年第4週に流行のピークとなりましたが、第9週から再び増加に転じ、第11週にもピークとなり、二峰性となりました。第25週は定点あたり報告数は0.08となりました。報告のあったのは6区のみです。川崎市は0.07、神奈川県(横浜、川崎除く)は0.10、全国は0.24でした。

迅速診断用検査キットによる型別の集計では、第4週をピークに減少し第25週にはA型3件(うち新型インフルエンザ1件)、B型3件の報告です。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

昨年は、過去5年間で最も高い水準で推移していました。今年に入ってから例年並みの水準ですが、第25週は2.61と高めで推移しており、注意が必要です。行政区別では港北区(8.57)が高く、次いで保土ヶ谷区(5.40)、瀬谷区・都筑区(4.00)となっています。川崎市は2.27、神奈川県(横浜、川崎除く)は1.92、全国は1.99でした。

< 手足口病 >

第25週は定点あたり0.79と、増加の兆しが見られます。例年夏にかけて増加してくることから、今後の動向に注意が必要です。川崎市は0.61、神奈川県(横浜、川崎除く)は0.10、全国は0.36と、いずれも横浜市より低い値です。

< 伝染性紅斑 >

例年並みの水準で推移していましたが、第13週から増加し、第25週は定点あたり1.44と、過去5年間で最も高い水準で推移しています。川崎市は2.12でした。全国では、過去5年間の同時期と比較して低い水準で推移していて、第25週は定点あたり0.22でした。例年、6月頃が一番高いようですので、今後の動向には注意が必要です。

< ヘルパンギーナ >

第25週は定点あたり0.60と、増加の兆しが見られます。川崎市は0.36、神奈川県（横浜、川崎除く）は0.25、全国は0.41と、いずれも横浜市より低い値です。例年、6月末～7月にピークを迎えるため、これからの季節は注意が必要です。

< 性感染症 >

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。5月は、4月に比べて全体としては横ばいです。19歳以下の若年層については、すべて女性で、性器クラミジア感染症が3例、尖圭コンジローマが2例、淋菌感染症が1例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

< ウイルス検査 >

2009年6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点44件(鼻咽頭ぬぐい液37件、糞便2件、直腸ぬぐい液3件、吐物1件、扁桃の膿1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、気道炎34人、胃腸炎(下痢・嘔吐含む)6人、手足口病2人、突発性発疹1人、アデノ感染症1人でした。

7月10日現在、気道炎患者1人からアデノウイルス2型、別の気道炎患者1人とアデノ感染症患者1人からアデノウイルス(型未同定)、手足口病患者1人からエンテロウイルス71型が分離されています。これ以外にPCR検査では、気道炎患者4人からヒューマンメタニューモウイルス、気道炎患者2人からエコーウイルス18型、胃腸炎患者1人からノロウイルスG2型、手足口病患者1人からコクサーキーウイルスA16型とヒューマンメタニューモウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

6月の感染性胃腸炎関係の受付は菌株が2株で腸管病原性大腸菌1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は11件でA群溶血性レンサ球菌が8件から検出されました。